

おばあちゃんの愛しかた

世利 宗二郎

「そーうちゃん。」

いつも会った時に言ってくれるぼくの名前。ぼくは大好きなおばあちゃんが優しくそう呼んでくれることをうれしく思っている。いつどこにいてもその呼ぶ声や頭の中に思いうかべると、おばあちゃんの顔をすぐに思い出すことができる。それくらいぼくにとっておばあちゃんの声は耳になじんでいる。だから、おばあちゃんとの思い出も声を思いうかべるといつもリアルに思い出すことができる。

ぼくが小さい赤ちゃんの頃、おばあちゃんはよく「そーうちゃん、そーうちゃん。」と言ってぼくを抱っこしながら、いつもかべかけ時計のところで立ち止まって時計を見せてくれた。そのかべかけ時計は、おばあちゃんちに三十年前くらいからある二つのお人形がついた古くからくり時計だ。時計の下から出ているひもを引っ張ると、四曲の音楽が順番になるしくみだ。おばあちゃんは、ぼくを抱っこしてゆらゆら身体をゆらしながら、ぼくのほっぺにほおずりして、曲をいつも聞かせてくれた。2つのお人形が時計の歯車をこいで、曲がなりおわるまでキコキコいいながら一生けん命に動いている。

小学生になって背がのびて、ぼくがそのひもに手が届くようになると、おばあちゃんに「みてみて！」といいながら自分でするようになった。あきずにも何度も何度もならした。おばあちゃんはそばでしゃがんでぼくを抱きしめながら一緒にあきずに見てくれた。赤ちゃんの時から小学生になるまでおばあちゃんと一緒に見てきたから、その時計はぼくの一番のお気に入りの時計になった。

ある日おばあちゃんが、介この施設に入ることになった。買い物途中でこけて背骨がまがってしまい一人ですらなくなつたからだ。

施設には、少ない荷物しか持って行けないので、その時計は持って行くことができなかつた。おばあちゃんには、

「そーうちゃんにあげて。」

と時計をお母さんにあずけた。お母さんが時計を持って帰ってきてくれた時、ぼくは時計を見てうれしかったとしても安心した。おばあちゃんとの思い出がまつた時計だから。でもおばあちゃんと一緒にこれから鳴らすことはないかもしれない。そう思ったらとても悲しくなつた。

時計を鳴らしてみた。そしたらおばあちゃんが「そーうちゃん。」と優しくいいながらほおずりしてくれたこと抱っこしてくれたことが思い出された。おばあちゃんの愛ってほっぺみたいにあふわふわであったかい愛なんだな。施設に入つてなかなか会えなくなつたけど、今はおばあちゃんと電話で話すようになった。おばあちゃん、ぼくを愛してくれてありがとう。これからはぼくが「おばーあちゃん」と呼んで元気にしてあげるからね！僕の夢は、「金持ち」になることだ。どうすれば、お金が稼げるのだろう